

自己評価報告書(最終報告)

報告者

教職実践力高度化コース/
末内 佳代

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

1) 目標: 心と学習の支援による「子どもたち誰にも、分かる喜びと学校生活の楽しさを伝えることのできる教師の育成」を目指す。

2) 計画

① 授業内容: 教職大学院での授業における体験が現場に復帰した際に、教師生活の新たな基盤となるような実践課題と理論が裏打ちしあった授業、楽しい授業を展開する。

② 授業方法: 実務家教員と研究者教員の連携により実践と理論が相互に裏打ちされた授業(教育実践力)。

: グループ別に、プランを練り(P)、作成した成果を発表し(D)、相互評価(C)を行う活動が取り入れられた授業(教職協働力)。

: ロールプレイングや意見交換などを通して大学教員と学生が双方向で語ることにより気づき生まれる授業(自己教育力)。

総じて教職実践力の向上を目指す授業に取り組む。

③ 成績評価: 主体的に取り組む授業態度、学生間の相互評価、チーム総合演習への汎用等を総合的に判断して評価する。

2. 点検・評価

筆者が主に担当した4教科の学生による授業評価は以下の通りである。

共通科目「支援を要する子どもの理解と指導」: 13の評価項目全てにおいて平均4.4以上の結果を得た。特に「(5) 授業の内容は教師の専門性を高められる内容であった」「(6) 授業の内容は、実践に活かせるのに適切な内容であった」という教育実践力を問う内容は平均4.7という高い評価を得ている。

共通項目「教育相談の理論と実践」: 評価項目全てにおいて平均4.5以上の結果を得た。

専門科目「教育相談の技法と実践」: 評価項目全てにおいて平均4.6以上の結果を得た。専門科目「生徒指導実践事例研究」: 評価項目全てにおいて平均4.4以上の結果を得た。

どの教科においても計画は概ね達成できたと思われる。学生からの肯定的評価を素直に受け止め、糧とし、さらに授業改善に努めたい。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- 1) 目標: 学生が気持ちよく学び、生活できる環境作りに努める。そのためには、人間関係が良好で、自由に意見交換ができ、風通しのよいチーム力を高める支援を行う。「程よい距離」を大切に信頼関係の構築に努める。
- 2) 計画 : ①学生からの週録に目を通すことにより実習や授業の進捗状況を把握し、指導助言を行う。②指導教員として、週1回の個人ゼミ、月1回の全体ゼミを通して、学生の主体的な学びや学生生活を支援する。
③学生と指導教員が連携協力校の事例検討会に参加することにより、学生の実習課題の解決を図るだけでなく「語ること」「分かち合うこと」「つなぐこと」の大切さを現場の教師と共に体験する。

2. 点検・評価

- 計画①と②はどれも計画通り実践することができた。7人(P1:4名、P2:3名)のゼミ生からは週1回の個別指導、月1回のゼミ生全員と教員によるシェアリングの指導構造が好評であった。教育支援だけでなく生活支援においても「語り」、「分かち合い」、「つなぐ」場となり得たと思う。
- 計画③は i 事例検討会、ii 研究授業、iii 実習校における構想・中間・成果の発表会における意見交換、を通して概ね達成できた。
実習校の一つである鈴鹿市立天栄中学校においては、教員のユニバーサルデザインの授業を3期に分けて参観し、助言した。そして、実習生による、26名の教員全員の実践をまとめた実践事例集作成のための指導を行った。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

- 1) 目標: 授業実践の目標に関連する研究テーマ「心と学習の支援」に関する研究を継続する。
- 2) 計画: 研究の成果を論文にまとめる。

2. 点検・評価

- これまでの実践を論文(単著1・共著2)にまとめることができた。計画は概ね達成できたと思われる。
- 「学校支援専門家チーム活用事業」における大学教員の役割: 日本教育大学協会研究年報』第32集に投稿し、採択された。○大学・教育員会・学校と連携した教育改善に関する実践研究(VI): 鳴門教育大学学校教育研究紀要No.28
- 大学・教育員会・学校と連携した教育改善に関する実践研究(VII)—鈴鹿市中学校における学校診断質問紙の構成について(Ⅱ)—: 鳴門教育大学学校教育研究紀要No.28

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

- 1) 目標: 大学側からの要請に主体的に取り組み職務を遂行する。
- 2) 計画①コラボレーションオフィス・コーディネーター(2年担任)として、教職大学院の学生が教育成果を上げるための環境整備に努め、職務を遂行する。
②教職大学院広報担当としてガイドブックやパンフレットの作成に関わる。

2. 点検・評価

計画①コラボレーションオフィス・コーディネーターP2担当として、学生の教育・学生生活支援を行い、職務を遂行できたと考える。教職大学院の教員としてこれからも、学生や学校現場のニーズを把握し、授業改善に努め、大学運営の一助となるよう取り組んでいきたい。

計画②教職大学院広報担当として、広報紙 CASE5: 人との「つながり」を作成した。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- 1) 目標: 連携協力校3校との教育研究活動を通じて学校運営を支援する。
: 関係機関との連携に主体的に関わる。
- 2) 計画①三重県鈴鹿市立天栄中学校、徳島県阿南市立富岡小学校、徳島県阿南市立桑野小学校において学生・学校・指導教員による教育研究活動を行う。②本学公開講座講師として修了生も含めた支援を行う。
③徳島市「学校元気アップ推進事業」における大学側運営担当及び学校支援専門家チーム講師として地域連携に協力する。

2. 点検・評価

下記の活動を行い、連携協力実習校・社会との連携に努めた。計画は概ね達成できたと思われる。延べで幼稚園2、小学校15、中学校12、高等学校1、教育員会3の計33回各地に出向いた。その内訳は実習指導18、事例検討6、研究授業4、講演4、出前授業1である。

○三重県鈴鹿市立立天栄中学校、徳島県阿南市立富岡小学校、徳島県阿南市立桑野小学校との連携による教育研究活動を行った。三重県鈴鹿市教育委員会主催の本学との連携事業に係る会議(市大連携推進委員会)において、実習責任教員として指導した学生が、学修成果を発表した。

○教育支援講師として 兵庫県立洲本高等学校、阿南市立津ノ峰小学校、藍住町夏季研修会、徳島市・佐那河内村小中学校生徒指導研修会、徳島市・佐那河内村人権教育大会に携わった。

○徳島市学校支援専門家チームとして 徳島市立徳島中学校、徳島市立洪野小学校において支援を行った。

○徳島県教育委員会スクールプロフェッサー

○徳島市不登校対問題対策検討委員

○教員免許状更新講習講師

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

教職大学院の広報紙、CASE5: 人との「つながり」は、筆者が取材・編集し、修了生である「学び続ける教員」7人からのメッセージをまとめたものである。次年度も、教職大学院の方向性に基いた「手にすれば誰もが教職大学院の学びが分かる」をモットーとした定員充足に繋がる広報活動に努めたい。